

連翹

佐藤 紀子 カナダ

この先を右に曲がるとすぐ左 黄色やさしき連翹が咲く

〈連翹〉の英語の発音覚束ず「フォーシシア、フォーシシア」繰り返し言ふ

「Forsythia」とスマホに言はせ練習す「フォー」しかまともに言へぬ私は

〈連翹〉を〈金の鈴〉と呼ぶ人に出会ひてすぐに親しくなりぬ

ワクチンの注射は齡との順とされ庇はれてをり われら年寄り

年古る

伊藤 幸子 岩手

運転歴三十年のわが受くるゴールド免許無傷の愛車

欲しいもの得られない苦を「求不得苦」と唱へて七十五の生まれ日よ

過去帳を見て心経をあぐること日々の慣ひのなかに年古る

過去世へと移り給へる 閨秀の歌そらんずる 彼岸中日

高安の埼玉野火止クリニツクの化粧まはしを今日も目に追ふ

ままだおる

薄葉 茂 宮城

春彼岸ふるさと福島「ふ」の文字はつねにやさしく柔きはなびら

震度5強 一夜のあけて立ち眩みしつ々見やればつぼみ色づく

逝く人は誰も旅人みちのくの踏まれつ々咲く白き爪草

渾身の力を込める球ひとつ投げて弾いて春の気を呼ぶ

春おほる細くとがりしこの月夜 食べたし福島銘菓へままだおる

放射線量

佐々木 勢津子 福島

「さびしいか」雪野に立てる榛の木に問ひしはきのふ 雀来鳴ける
雪どけの庭にふきのたう見つけたり未だ眠さうな四つ五つほど
天気予報につづく各地の放射線量同じトーンでテレビは映す
その数値に溜息をつく日々ありき「あなたの地域の放射線量」
気がつけばへ人生の秋へ夫がのこす食パンの耳けさも食べつつ

汚染土

金子 智佐代 茨城

緑のゼッケン、フロントに貼るダンブカー中間貯蔵施設へ走る
連結車両のごとく連なりダンブ行く大熊、双葉へ汚染土を載せ
汚染土と呼ばれる土の行く末を誰が知りぬん施設に集む
十年後の余震ふたび壁を裂く 中通りなるおとうとの家
原発の運転差し止め判決にコメントせぬ知事「当事者ではない」

雨の午後

尾崎 潤子 千葉

春光の呼び合ふやうに梅咲きて明度増しゆく二月の空は
あやとりの毛糸を川にして舟にして母の指ひらひら動く
風の音やまざる夜更け浮遊する無数の水母おもひてねむる
マスクしてゐても香りは届きたりぼちりぼちりと咲く沈丁花
枯草のいる濃ゆるくなる雨の午後鳥のつばさも湿りもつらん

雨の降るまへ

三 浦 陽 子 長 野

雨の降るまへに帰つてきたことが少しさびしい夕刻の雨
突然へらへらつきにへれだけの師のライン三度目に来るへ了解の文字
透明な半濁音符こぼれでる薄むらさきのムスカリの春
はじまりは小さき促音くさの芽もうぐひすの音もそして別れも
短くていい長くてもかまはない春のたよりを待つてをります

清き天涯

志 賀 千 ヨ 子 岐 阜

うた一首かんがへる間に窓際のしろき朝霧消えて明るむ
風の夜の更けて庭面にしろじろと総状花序の馬酔木揺れをり
自粛して寂しきわれを亡き人の立居が救ふ夢に出で来て
コロナ無き清き天涯見て来しか紅梅に二羽憩ふうぐひす
紅炎のごと咲き満つる梅一木団地の坂の道をいろどる

ただ波の音

鷺 巢 錦 司 静 岡

トランプの紅きジャックの騎士のごと木瓜の花咲くきさらぎの庭
この卵を生みし仲間が何万羽また殺さるる のみどがよどむ
震災の追悼式は十年で終れり あとはただ波の音
人類がコロナに敗れし証なり東京五輪は歴史に刻め
むらさきの傘をすぼめて春雨の庭に立つひと クロッカス咲く

ひとくち

野村 まさこ*愛知

九時間の予定の手術 二時間で中止となって父は目覚める
開かれてただ閉じられた父の腹 スマホふるえる「肝転移あり」
突然の食事制限解除日に遺族年金調べる父は
無花果が熟すまではと父のため介護ベッドを借りる早春
ひとくちが砂粒ほどの時を足す いちご大福 父はひとくち

つまらぬ

梶原道幸 熊本

精励杯ゴルフコンペに戴きしシクラメンにて新種のピンク
落葉ごとスコップに取り移しやるまだ眠たげよ三月の蛇
旋回をなせる椿の花いくつ暫し淀みに見しが、つまらぬ
山並に大きな姿を見せて立つ友の指さす石鎚山は
泰然と紳士がタバコ嗜める脇を通りてトイレを探す

きさらぎの雨

新田節子*宮崎

看取ること叶わぬままのコロナ禍の死者268万のその家族
邪魔をしたつもりはないが近付けば黒猫三毛猫別れゆきたり
背を伸ばし自在に揺れる猫じゃらしすっからかんとなりて楽し気
散る力失せて乾びし山茶花をようやく濡らすきさらぎの雨
きさらぎの雨たつぷりと地を濡らし今朝いっぴきのカエルが鳴くよ